

①次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

関白殿、黒戸より出でさせたまふとて、女房のひまなく候ふを、関白様が、黒戸からお出でになられるというので、女房たちが隙間なくお仕え「あないみじのおもと達や。翁をいかに笑ひたまふらむ」とて、分け申しあげているのを、「やあすばらしい女房たちよ。お爺さん(私)をどんなに出でさせたまへば、戸口近き人々、色々の袖口して、御簾引き上げたか笑っていらつしやることだらう」と言つて、問をかき分けてお出になられるのに、権大納言の、御査取りてはかせたてまつりたまふ。いと物々しで、戸口に近い女房たちは、いろいろの袖口を見せて、御簾を引き上げたところ、くきよげによそほしげに、下襲の裾長く引き、所せくて候ひたまふ。権大納言が、関白様の御査を取つてお履かせ申しあげなされる。とても重々しく「あなめでた、大納言ばかりに、査取らせたまつりたまふよ」とれいで立派なようすで、下襲の裾を長く引き、あたりも狭いまでのお姿でお仕え見ゆ。

申しあげなされる。「ああすばらしい、(関白様は)大納言ほどの方に、査をお取らせ申しあげなされるよ」と見える。

(注) 1 藤原道隆 2 清涼殿北廊の西の部屋

3 女房たちを親しみを込めて呼んだ名  
4 藤原伊周(道隆の嗣子)

(1)傍線部①～⑤の敬語の種類を次から選び、それぞれ誰から誰に対する敬意かを答えよ。

ア 尊敬語 イ 謙讓語 ウ 丁寧語

から  
へ

③次の文章の( )には「参り」または「まかり」が入る。文意からどちらが入るか答えよ。

おなじ少将、病にいたうわづらひて、すこしおこたりて内裏に同じ(季繩の)少将が、大変に重い病気に苦しんで、少し快方に向かったので宮中( )たりけり。(中略)掃部の助にあひていひけるやう、「みだりに心地のまだおこたり果てねど、いとむつかしうころもとなくはべさはまだ完全に治つてはいないけれど、(宮中に行かないと)とても不快で不安

ればなむ参りつる。のちは知らねど、かくまで侍ること。( )でございまして参上しました。これからのことはわかりませんが、今日までは出でて、あさてばかり( )来む。よきに奏したまへ」などいひ生きていましたよ。ここで( )て、明後日ころまた( )しましよおきて( )ぬ。

(天和物語・二〇二)

③ ④

① ②

(2)波線部A～Cの主語を、次から選んで答えよ。

ア 関白殿 イ 権大納言  
ウ 女房 エ 工作者

A B C

①種類 から  
②種類 から  
③種類 から  
④種類 から  
⑤種類 から

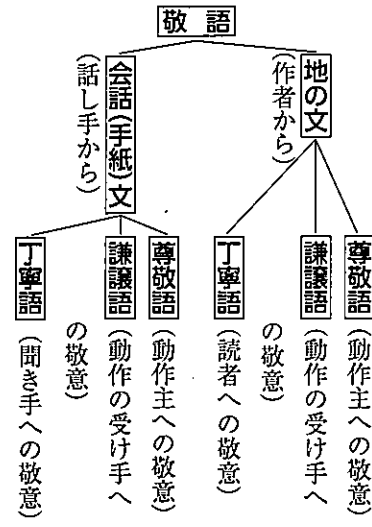
②次の傍線部の敬語のうち、一つだけ敬意の方向が違つものを選び、「誰から誰に対する敬意」かを答えよ。

大井に季繩の少将すみけるころ、帝、のたまひける、「花おもしろ大井に季繩の少将が住んでいたころ、帝が、おっしゃつたことには、「桜の花がくなりなば、かならず御覽せむ」とありけるを、おぼし忘れて、おは見ごろになつたならば、必ず見よう」ということだったので、(帝は)お忘れにしまさざりけり。

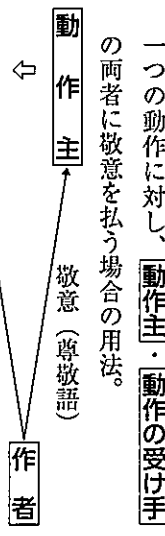
(天和物語・一〇〇)

敬語のまとめ

敬語の種類と敬意の対象



二方面に対する敬意



一つの動作に対し、謙讓語と尊敬語を併用して両者に敬意を払う。  
例(かくや姫は)朝廷へ(帝)に御文奉りたまふ。  
(かくや姫は)帝にお手紙を差しあげなされる。  
(竹取物語・帝の求婚)

二重敬語(最高敬語)

特に身分の高い人(帝など)の動作に対し、尊敬語を重ねて用い、特に高い敬意を表す。  
例問は せ たまふ。(お尋ねになる)絶対敬語

帝など絶対的な人物への決まった敬語表現。  
例奏す…(帝・上皇・法皇に)申しあげる  
啓す…(皇后・中宮などに)申しあげる  
自尊敬語(自敬敬語)  
特に高貴な人物が用いる「自分で自分に敬意をはらう」表現。

① 次の傍線部の敬語の説明として最も適當なものを、後から選んで答えよ(同じものを何度用いてもよい)。

御女、村上の御時の宣瀧殿の女御、かたちをかしげにうつくしうおはしけり。内へまゐり給ふとて、御車にたてまつりたまひければ、わが御身はのり給ひけれど、御ぐしのすそは母屋の柱のもとにぞおはしける。  
(大鏡・御尹)

- ア 尊敬の動詞
- イ 謙讓の動詞
- ウ 丁寧の動詞
- エ 尊敬の補助動詞
- オ 謙讓の補助動詞
- カ 丁寧の補助動詞
- キ その他

①  ②  ③  ④  ⑤

② 次の傍線部の敬語の説明として、最も適當なものを、後から選んで答えよ(同じものを何度用いてもよい)。

今は昔、和泉式部がもとに、帥宮通はせたまひけるころ、久しく音せさせたまはざりけるに、その宮にさぶらふ童の来たりけるに、御文もなし。帰りまゐるに、

待たましもかばかりこそはあらましか思ひもかけぬ今日の夕暮れ持てまゐりて、まゐらせたりければ、まことに久しくなりにけり、と心ぐるしくて、やがておはしましけり。  
(古今談話集・十六)

- ア 尊敬の動詞
- イ 謙讓の動詞
- ウ 丁寧の動詞
- エ 尊敬の補助動詞
- オ 謙讓の補助動詞
- カ 丁寧の補助動詞
- キ その他

ア 聞こえ    イ 聞こしめし    ウ たまはり  
エ まゐらせ    オ おほせられ

(2) 傍線部の現代語訳として最も適當なものを、次から選んで答えよ。

- ア 尼一人ずつにお休みをください
  - イ 尼を一人減らしてください
  - ウ 私一人にはおひまをください
  - エ 私一人だけをお抱えください
- 

⑤ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

河侯が曰く、「今五日ありておはせよ。千金の金を得んとす。それを奉らん。いかでかやんごとなき人に、今日参るばかりの粟をば奉らん」  
(宇治拾遺物語・一五ノ二)

(1) 傍線部①を現代語訳せよ。

(2) 傍線部②の文中での意味として最も適當なものを、次から選んで答えよ。

- ア 参上する
  - イ 召しあがる
  - ウ お飲みになる
  - エ 当惑する
  - オ 到着する
- 

⑥ 次の傍線部は、誰に対する敬意を表しているかを答えよ。

(行基は) 礼盤にのぼりて、「真福田丸が藤袴、我ぞ縫いし片袴」と言ひて、ことごとく言はでおり給ひにけり。弟子ども怪しみて、問ひたてまつりければ、  
(古本説書集・下ノ六〇)

オ 謙讓の補助動詞    カ 丁寧の補助動詞  
キ その他

①  ②  ③  ④  ⑤

③ 次の傍線部の文法的説明として最も適當なものを、後から選んで答えよ。

「わが歌の中には、み吉野の山かき曇り雪降れば麓の里はうち時雨つつこれをなん、かの類にせんと思ひ給ふる。もし世の末におぼつかなく言ふ人もあらば、「かくこそいひしか」と語り給へ」とぞ。  
(無名抄)

- ア ①・②はともに尊敬の意味の補助動詞
  - イ ①・②はともに謙讓の意味の補助動詞
  - ウ ①は尊敬・②は謙讓の意味の補助動詞
  - エ ①は謙讓・②は尊敬の意味の補助動詞
- 

④ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

さてこの尼、説法のなかばばかりに、つい立ちて、高らかに曰く、「導師の御房(A)候へ。尼一人にはいとまたび候へ」  
(羅談集・四ノ六)

(1) (A)に入る「聞く」の尊敬語として最も適當なものを、次から選んで答えよ。

⑦ 次の傍線部は、誰から誰に対する敬意を表しているかを答えよ。

(藏人が能信に)「(東宮が)申させたまふべきことのおさぶらふにこそ」と申すを、  
(大鏡・御尹)

①  ②

⑧ 次の傍線部の敬語の説明として最も適當なものを、後から選んで答えよ。

判官申しけるは、「ただありのままに言はれよ。かかる夢を見て侍るなり。御房を縛りたるが、仏とのみ見ゆるぞ」と云へば、この法師、はらはらと泣きて申しけるは、  
(沙石集・一〇ノ六)

- ア 「この法師」に対する敬意で、尊敬語
- イ 「この法師」に対する敬意で、丁寧語
- ウ 「この法師」に対する敬意で、謙讓語
- エ 判官に対する敬意で、謙讓語
- オ 判官に対する敬意で、丁寧語
- カ 読者に対する敬意で、尊敬語
- キ 読者に対する敬意で、謙讓語

①  ②  ③

解答

- ① (1) ① ア・作者から関白殿へ
  - ② ア・関白殿からおもと(女房) 達へ
  - ③ イ・作者から関白殿へ
  - ④ ア・作者から権大納言へ
  - ⑤ イ・作者から権大納言へ
- (2) A ウ B イ C エ
- ③ ① 参り ② まかり ③ 参り ④ まかり

解説

- ① (1) ①は「出でさせたまふ」という二重敬語の中の尊敬の補助動詞だから、動作主「関白殿」への作者(地の文だから)からの敬意である。②は尊敬の補助動詞。「笑ひ」という動作主は「おもと達」である。また、会話文の中の敬語だから話し手「関白殿」からの敬意である。③は謙譲の補助動詞。「沓を」はかせ」という動作の受け手(すなわち「はく」人)への敬意、だから関白殿への敬意である。④は尊敬の補助動詞。動作主「はかせ」る人「権大納言」への敬意である。③・④とも地の文だから、作者からの敬意である。⑤は謙譲の補助動詞。「沓を」を取らせ」という動作の受け手(すなわち「取る」人)への敬意なので、「権大納言」への敬意である。会話文の敬語だから会話の話し手(この場合「作者」)からの敬意である。
- (2) Aの「候ふ」は動詞である。訳文から考えて謙譲語であるから、

主語「女房」が(「の」は主格の格助詞である)「お仕え申しあげ

- る」という意味である。Bの「候ひ」も動詞でありAと同じ訳文である。「いと物々しく…」以下は権大納言の描写であるから、主語は「権大納言」である。「候ふ」の敬意の対象は「関白殿」、「たまふ」(尊敬の補助動詞)の敬意の対象は「権大納言」である。Cは尊敬語もなく、関白殿と権大納言のやりとりを見ている作者の感想を受けているから、主語は作者である。
- ② ①・③・④が地の文の、②が会話文の中の敬語であるから、練習し

- ① 尊敬の動詞 作者から帝への敬意
  - ② 尊敬の動詞 帝から帝への敬意
  - ③ 尊敬の動詞 作者から帝への敬意
  - ④ 尊敬の動詞 作者から帝への敬意
- ③ 「参る」 高貴な場所へ参上する。
- ③ 「まかる」 高貴な場所から退出する。

①は「内裏に」とあるから「参る」。これで④もわかる。参上したのだから「いひおきて退出した」はずである。会話の中の②は「出でて」とあるのだから「退出し」て、③ではあさってにまた「参上しよう」と言うのである。場面と「参上・退出」を理解することが大切である。

解答

- ① ① エ ② イ ③ エ ④ ア ⑤ ア
- ② ① エ ② イ ③ イ ④ イ ⑤ ア
- ③ エ
- ④ (1) イ (2) ウ
- ⑤ (1) いらっしゃってください (2) イ
- ⑥ ① 行基 ② 行基
- ⑦ ① 蔵人から能信へ ② 蔵人から東宮へ
- ⑧ ① ア ② イ ③ エ

解答

- ① ①「おはし」は尊敬語。形容詞「うつくし」の連用形ウ音便「うつくしう」に接続しているので、補助動詞の用法。
- ② 「内(＝内裏)」「へ」「まゐる」る、つまり、高貴な場所へ行くということなので、謙譲の本動詞。
- ③ 「給ふ」は動詞「まゐり」に接続しているので、補助動詞。「まゐり」は心情語でも知覚動詞でもないの、尊敬語である。
- ④ 「たてまつり」は「御車に」とあるので、「乗る」の尊敬語で本動詞。「たてまつる」には尊敬と謙譲の意があるが、「飲む・食ふ・乗る・着る」の意で用いられる場合は、尊敬語である。
- ⑤ 「おはし」は「あり」の尊敬語。係助詞「ぞ」をはさんでその上に「に」があるが、これは場所を表す格助詞なので、本動詞。
- ② ① 「たまは」という形は四段活用。四段活用の「たまふ」は尊敬語。尊敬の助動詞「させ」に接続しているので、補助動詞。

② 「宮に」とあるので、「お仕えする」意を表す謙譲の本動詞。

③ 直前が動詞「帰り」だが、「まゐる」には本動詞の用法しかない。「宮」のもとに帰って参上するという文脈なので、謙譲語。

④ 「まゐらせ」は謙譲語。文節の頭にあるので本動詞。

⑤ 「おはしまし」は尊敬語。直前が副詞なので、本動詞。

③ ① 下二段活用なので、謙譲語。動詞「思ひ」に接続しているので、補助動詞。活用だけで判断できるが、会話文中で、自分の「思ふ」という心情に用いられることから、謙譲語と判断できる。

② 会話文の末尾にあつて係り結びもないので、四段活用の命令形。動詞「語り」に接続しているので、補助動詞。

④ (1) 選択肢で該当する「聞く」の尊敬語は、「聞こしめす」である。

(2) 「いとま」は「ひま」の意。「たび」は「与ふ」の尊敬語「たゞ」の連用形。体言に接続しているので、本動詞。「候へ」は、動詞「たび」に接続しているので、補助動詞。補助動詞の「候ふ」は丁寧語になる。

⑤ (1) 「おはせよ」は尊敬語「おはす」の命令形。「て」を介して動詞の連用形に接続しているが、「あり」と「おはせよ」は別の動作であるので、本動詞。尊敬語の命令形は「お…なさい」「や…してください」と「依頼・お願い」の形で訳すとよい。

(2) 下に食材である「粟」があるので、「食べる」の意。「飲む・食ふ」の意である場合は尊敬語。ここは「召しあがる」と訳す。

⑥ ① 四段活用なので、尊敬の補助動詞。動作主の行基への敬意。

② 補助動詞なので、謙譲語。動作の受け手の行基への敬意。敬意の方向については、「誰から」は地の文なら筆者、会話文なら

その発言者であることを押さえておく。傍線部は、東宮の使者として能信のところへ遣わされた藏人の発言中にある。

① 発言者の藏人からの敬意。「申さ」は謙讓語で動作の受け手に対する敬意を表す。ここでは東宮の言葉を書く「能信」である。

② 発言者の藏人からの敬意。「せたまふ」は二重尊敬で、尊敬語は動作主への敬意。ここでの動作主は「東宮」である。

③ ① 尊敬の助動詞「る」の命令形。判官が会話の中で法師に対して「ただありのままを話してください」と言っている部分。したがって、動作主は「この法師」である。

② 「侍る」は「て」を介して動詞に接続しているので、補助動詞。補助動詞の場合は丁寧語。これも判官の会話の中にある。したがって、聞き手の「この法師」への敬意である。

③ 「申し」は謙讓語。「この法師」が「申した」相手、つまり動作の受け手の「判官」に対する敬意である。

### 現代語訳

① (藤原師尹様) 姫君は、村上天皇の御代の宣耀殿の女御(藤原芳子様)で、容貌はいかにも美しくかわいらしくいらつしやう。宮中に参内なさるといつて、お車にお乗りなされたところ、ご自分のおからだは(お車に)お乗りなされたけれど、御髪(うぶ)の端(は)が(まだ)母屋の柱のもとにおありになった(というほど髪が長かった)。

② 今となつては昔のことだが、和泉式部のもとに、帥宮が通つていらつしやうなところ、(宮が)長いこと(式部を)訪ねなされたとき、その宮にお仕える童(わらわ)がやつてきたが、(宮からの)お手紙もない。(童が宮のもとへ)帰参するときに(式部は)、

(今日は最初からあきらめて、宮様のおいでをお待ちしていませんでしたが)もし、お待ちしていたとしても、(悲しみは今の私と同じ)このくらいでしょう。思いがけなく童が来て、宮様が私を思つてくださらないことがわかり、つらい今日の夕暮れです。

(童がこの歌を宮のもとに)持つて参上して、差しあげたところ、本当に(式部を訪ねないで)長い時間経つてしまったなあ、とかわいそうで、そのまますぐにおいでになった。

③ 「私の歌の中では、  
吉野山の空が曇り雪が降ると、麓(ふもと)の里にはさつと時おり時雨が過ぎて行く。

この歌をこそ、その類(代表歌)にしようと思います。もし後の世に、(俊恵の代表歌が)はつきりしないという人がいたら、「俊恵自身はこう言っていた」とお話しください」と(おつしやう)。

④ さてこの尼は、説法の半ばあたりで、突然立ち上がり、大声で言うことには、「導師のお坊様お聞きくださいませ。私一人にはおひまをくださいませ」

⑤ 河侯(かこう)が言うことには、「あと五日していらつしやうてください。千両の金を得ることになっている。それを差しあげよう。どうして尊い賢人に、今日召しあがるだけの粟(あわ)を差しあげようか、いや、そればかりのものが差しあげないなどということはない」

⑥ (行基は) 仏前の高座にのぼつて、「真福田丸(まふたなまる)の藤袴(ふじばかま)、私が縫(ぬ)った片方の袴(はかま)と言つて、ほかのことは何も言わないでお下りになつてしまった。弟子たちは不思議に思つて、(行基に)お尋ね申しあげたところ、

⑦ (藏人が能信に)「(東宮が)申しあげなさらなければならぬことがございませう」と申しあげるので、

⑧ 判官が申ししたことには、「ただありのままを話してください。こんな夢を見ているのだ。あなたを縛っているのが、仏様(を)縛っているよう)だと見えるのだ」と言つと、この法師ははらはらと泣いて申しあげたことには、

# 30

## 活用のない自立語

名詞・代名詞・副詞・連体詞・感動詞・接続詞

解析古典文法  
演習ノート

P.62

P.63

### 解答

- ① ① オ ② エ ③ ア
- ② (1) ア (2) イ (3) イ (4) ア
- ③ (1) どうして助からないことがあるのか、いや、助かるだろう
- (2) まったく眠ることができず
- (3) 月を見なざるな
- (4) まさか勝つてゐることはございませう
- ④ (1) イ (2) ア
- ⑤ (1) イ (2) オ

### 解答

- ① 名詞は、単独で、または助詞や助動詞を伴つてさまざまな働きをする。
- ① 「少納言よ」と呼びかけているものであり、独立して意味をもっている。
- ② 格助詞「の」を伴つて「雪」という名詞を修飾している。
- ③ 「雪はどんなだろう」という訳文からわかるように主語になっている。
- ④ (1) 「やがて」は「すぐに」という訳文から「すぐ」という状態を示していることがわかる。
- (2) 「なほ」は「やはり・もつと」という訳をしつかり覚えておこう。
- (3) 「あまた」は「たくさん」という程度を表している。
- (4) 「おのづから」は「自然と」と、動作・作用・変化がどのような状態で行われているかを表している。

③ 「私の歌の中では、

吉野山の空が曇り雪が降ると、麓(ふもと)の里にはさつと時おり時雨が過ぎて行く。

この歌をこそ、その類(代表歌)にしようと思います。もし後の世に、(俊恵の代表歌が)はつきりしないという人がいたら、「俊恵自身はこう言っていた」とお話しください」と(おつしやう)。

④ さてこの尼は、説法の半ばあたりで、突然立ち上がり、大声で言うことには、「導師のお坊様お聞きくださいませ。私一人にはおひまをくださいませ」

⑤ 河侯(かこう)が言うことには、「あと五日していらつしやうてください。千両の金を得ることになっている。それを差しあげよう。どうして尊い賢人に、今日召しあがるだけの粟(あわ)を差しあげようか、いや、そればかりのものが差しあげないなどということはない」

⑥ (行基は) 仏前の高座にのぼつて、「真福田丸(まふたなまる)の藤袴(ふじばかま)、私が縫(ぬ)った片方の袴(はかま)と言つて、ほかのことは何も言わないでお下りになつてしまった。弟子たちは不思議に思つて、(行基に)お尋ね申しあげたところ、

⑦ (藏人が能信に)「(東宮が)申しあげなさらなければならぬことがございませう」と申しあげるので、

⑧ 判官が申ししたことには、「ただありのままを話してください。こんな夢を見ているのだ。あなたを縛っているのが、仏様(を)縛っているよう)だと見えるのだ」と言つと、この法師ははらはらと泣いて申しあげたことには、

③ (1) 「などが」は「む」(推量の助動詞)と呼応して、「どうして…か」(疑問)「どうして…か、いや、…ない」(反語)の意となる。この場合は反語である。「ばかり」は限定を示す副助詞(だけ)と訳すのである。

(2) 「つゆ」は「打消の語」と呼応して「まったく…ない」の意となる。「まどろまれず」の「れ」は可能の助動詞である。

(3) 「な」は禁止の終助詞「そ」と呼応して「…(する)な…ないでくれ」の意となる。「そ」は活用語の連用形(カ変・サ変は未然形)に接続する。

(4) 「よも」は「打消推量の語」と呼応し「まさか…ないだろう・まゝ」の意となる。「侍り」は直前に動詞があることから、補助動詞なので丁寧語。その部分もきちんと訳さなくてはならない。

④ 「ある」が動詞の場合は「(そこに) いる・ある・存在する」と訳せる。連体詞の場合は、不特定の事物や時を示している。

(1) 「ある人」は「そこにいる人」の意味ではなく、不特定の誰かを指している。

(2) 「その場にいる人」という意味になっていることがわかる。

⑤ (1) 「しかるに」は逆接の接続詞。ほかにも、「かかれど・されど」などがあるが、現代語に近い語感なので、きちんと覚えておく長い古文を読む際に役立つ。

(2) 「ただし」は「前に述べた事柄の不足を補う」という補足の接続詞である。現代語と使われ方は同じである。